

## 七章 摘出手術

4月10日入院。

しかしこの日付は、あらかじめわかっていたものではなかった。

イタリアの腫瘍科では通常主治医が複数いる仕組みで、わたしの主治医は中年のベテランの女医と若い男女の医師の計3人だった。わたしが受診する際にはそのうちの2人か3人がいつもいた。この仕組みだと、3人の医師のうち1人が休んでいても、ふだんからわたしを知っている医師が同じように診察や投薬を続けることができ、患者は安心だし医療の質も安定する。ただし病院側が医師にかかる費用は、主治医1人の日本にくらべると3倍近くになるだろう。

その若い女医に言われていたのは「4月の第2週」。

わたしは面食らった。

「何それ？ 月曜か水曜か金曜かわからないの？」

「わからない。前の日に電話するから、そしたら次の日の朝、来てちょうだい」

「どうして曜日が決まらないの？」

「どうしてって」と、今度は女医のほうがわたしの質問に面食らっている。

「だって緊急の入院だって手術だってあるでしょう？ ベッドが空かなきゃあなた入れないじゃないの」

「日本じゃひと月前から決められるわよ」

「そんなこと言ったってイタリアじゃどこの病院もそうよ」

どこも、というのは、国民健康保険が適用される公立病院はどこも、ということで、国民健康保険適用外の病院はその限りではない。イタリアの公立病院のいいかげんさを見ていると、金持ちと外国人が高い金を払って民間医療保険に加入し、その保険を使って民間病院にかかる理由がよくわかる。もっともわたしの通っている、イタリアで1、2を争う「国立がんセンター」は、民間医療

保険適用の患者も受けつけているらしいが、夫の雇用元のアメリカ資本の会社は、外国駐在員はその国の国民健康保険に加入するべし、という方針なので、わたしには縁がない。

話は少し戻るが、最初、入院予定は4月の第1週と言われていた。化学療法が全部終わった3月中旬のことである。しかし今年は復活祭が早かったため子どもの学校の春休みが4月の第1週いっぱいまであったので、頼んで1週間遅らせてもらったしだい。復活祭の日は毎年違う。どんな由来かは知らないが、辞書を見ると「春分後の最初の満月の次の日曜日」だそうなの。

こうなっては電話を待つしかない。実際は、困った話である。買い物や、おかずの作りおきも、入院が月曜日か金曜日かわからないのでは計画的にできない。幸い、国際クラブの友人が手術はいつ？ 晩ご飯はいる？ と何人も聞いてくれるから、今回も全面的に甘えることにした。でっぴりと太ったマルティンが、「まかしとき。わたしが人数集めて都合のいい日をそれぞれ聞いて、ちゃんと案配して毎晩食事が届くようにしてあげるから、安心して入院してなさい。あんたは自分がよくなることだけ考えてればいいんだからね」と胸を叩いて引き受けてくれた。

マルティンは天使のようにやさしく、美を愛する心と教養に加えて馬のごとき馬力があり、しかも計画をたてて詰めていく、という事務的有能さを兼ね備えた、類（たぐい）まれな女性である。しかもわたしにとって幸運なことに日本轟眞（びいき）。フランス人で英語を話すひとは少なく、ましてやフランス人ばかりで固まっている場合が多いなかで、国際クラブで役員をするような開放的なひとは珍しいのだが、彼女は例外である。ま、それを言うなら、わたしもかなり例外的な日本人ではあるが。

西洋人の、特に男性から「あなたは日本人らしくないね」と初対面で言われる。最初は褒（ほ）められたのだろうか、それとも貶（けな）されたのだろうかかと悩んだが、単に感想を述べただけだとわかってからは気が楽になった。何かを尋ねられたら、わたしは怖（お）じずにはっきり自分の意見なり印象なり

を言う。尋ねられなくてもどんどん自分から話しかける。ものごとを整理して考えて話したり、また知らなかったことを聞いたりするのは飽きない。好奇心が強いから、かなりの範囲の話題に興味を持ってついていけるし、自分からも提供できる。ひとを笑わせるのも好きである。そのへんが日本人らしくないというのだ。

実際欧米では、日本人がものをはっきり言わないことには定評があるらしい。日本にも行ったことがあるらしいジャンフランコは、「ぼくが日本人に、ローマに行ったことはありますか、と聞いたときだよ。『良い所だそうですね』と、こうだよ。もう一度同じ質問をしても同じ答えだ。ぼくは行ったかどうかを聞いてるんだぜ。印象を聞いてるんじゃない。それくらい言ったっていいじゃないか。ほんとに日本人ときたら何を考えてるんだかわからない。イライラするね」

この背後には、日本人が、相手の国に行ったことがないと正直に言うのは失礼ではないかと考えるのに対し、欧米人は、それをまったく失礼ではないと考える、という差があるのだろう。こういう細かな気の回し方は、同じ考え方をする狭い文化のなかでは通用するし必要ともされるが、幅広い異文化のなかでは通用しにくいのもかもしれない。

「でも、いくらものをはっきり言うほうがいいといっても、外国だと、何これ、って思うことがあるでしょ。それを正直に言うのは失礼じゃない？」とわたしは別の機会にイギリス人のニックに尋ねてみた。「それは嫌いだとか馬鹿じゃないかだとか言えば失礼だけれども、どうしてそんなことをするのかかわからない、理由を教えてくれ、と言えば充分礼儀にかなっているよ。むしろ、自国の文化に関心を持ってもらえて嬉しいと、喜んで説明してくれるんじゃないかな」と彼は教えてくれた。

これは役に立つ助言だった。イタリアで当惑したり怒ったりすることは多いが、わたしは相手の立場に立って考えることが苦手で、ストレートに不満をぶつけるしか能がなかった。わたしの態度は幼稚だが、ニックの態度は大人である。ひとつ勉強になった。

また欧米ではいったいに、パーティや食事に招かれたときに、初対面でも楽

しい話題を提供したりユーモアに富んだ受け答えができるというのは、日本ではよりはるかに重要なことのように見える。一度、そんなに親しくないのにどうしてわたしが呼ばれたのだろうかと思議に思ったことがあるが、どうも客の顔ぶれに変化をつけるためだったようだ。幸いそのときは、日本で蛙はケロケロ、クワックワツと鳴くけど、イタリアでは？ ドイツでは？ じゃあ鶏(にわとり)の鳴き声は？ などとくっちゃべって大笑いだったから、たぶん招かれた課題は果たしたのだろう。

あまり頻繁(ひんぱん)に「日本人らしくない」と言われると、ではいったい日本人らしいとは、自分の意見を言わないほかに何があるのだろうと、パトリツィアに聞いてみたことがある。礼儀というものを重んじる彼女は少し上目遣(うわめづか)いにわたしを睨(にら)み、恨めしそうな顔をして笑った。

「あなたのお仲間の悪口は言いたくないけど、あなたが尋ねるから言うのよ。日本人は閉鎖的よね。いつも日本人ばかりで固まって、ほかのひとたちと交わらない」

「それはことばの問題もあるんじゃないのかしら」

「そうね。でも、片言でも話したがるひとはいるでしょう？ でも日本人は話したがるらない。それから、言っていないかしら、きっちりしていて融通がきかない、堅苦しいって印象があるわね。とてもよく働くけど、こうしなければいけない、ってというのが強くて、縛られている感じ。息苦しくないかしら」

思い当たる節が多々ある。特に日本人の閉鎖性に関連してはすぐに。

わたしがツルツッパゲの頭に帽子をかぶって息子のサッカークラブの練習試合の応援に行き、息子が出るたびに息子の名前を連呼していると、20分後、わたしの闘病事情を知った他のイタリア人の親も、日本人のウチの子の名前を叫び始めてくれた。息子がそのチームに入ってひと月ほどしかたっておらず、わたしと他の親たちとは初対面に近いくらいだったのに、である。

ひどく嬉しかった。感激した、と言っていい。

もし日本で、同じチームとはいえ、新しく入った外国人でがんにかかっている親が子の名を連呼していたとして、その名を同じように呼んでやる日本人の

親がどれだけいるだろう。

横目で見ているばかりではないか？

日本人はよそ者に冷たい。すでにできあがっている集団に新しくひとが入ってきたとき、馴染むまでにおそろしく時間がかかる。日本人がいったいに不親切だとは、わたしは断じて思わないが、身内になら親切でも、よそ者には同じくらい親切でなくてもいい、という感じはある。それに比べると絶対には言わないが、欧米ではよそ者にも、身内にも、わりに同じように親切である。

わかりやすい例が車の運転マナーだ。車を運転していて狭い道から広い道に出るとき、広い道の交通量が多いと、なかなか狭い道からは出られない。しかし欧米だと、広い道を走る車の運転手がそれを察して自分の車のスピードをゆるめ、さああなた出なさいよ、と狭い道から出ようとする車の運転手に合図してくれることが多い。お互い様だからだ。しかし日本では、こういった見知らぬ人に親切にする習慣が、ほとんどない。

キリスト教のせいなのだろうか？ 大陸でひとの移動が多いのに比べ、日本人が鎖国をしてきた島国根性なのだろうか？ それとも単にラテン気質なのだろうか？

そしてわたしはここにおいて、ずいぶん自由であると感じる。性格的に「しなければいけない」より「したい」が先に来るが、ここはパトリツィアの言うとおりそれがかまわないし、積極性が日本よりずっと高く評価される気がする。

「美味しい」と「きれい」が大好きなお国柄では何事にも楽しいことや楽しむことが大切で、義務の遂行は優先順位が低いのだ。ま、その分どうしようもなく、いいかげんでもあるが。

この国に4年住んでいるあいだに、わたし自身がずいぶん変化し、異文化にうまく適応した、というところはある。あるいはわたしに元からイタリア人的な素質があったのか。日本でわたしは「空気が読めない」困ったところがあるのを考えると、元から日本人らしくないのかもしれない。

日本人のママ友からは「あなたみたいなひとは見たことがない」とよく言われる。わたし自身にとっては意外なことだが、実行力がすごい、と言われるの

だ。「日本人の奥さんのなかでも、4人子どもが欲しいとか、今まで経験のない楽器をこの際イタリア人から習ってみたいとか、国際クラブの役員をしてみたいとか、寿司のつくりかたを外国人に教えてみたいとか、思うひとはたくさんいるわよ。でも実際にやってしまうひとはめったにいない。あなたは次々に実行してる」はあ、そんなものかしらん。

で、初めは褒（ほ）められているのだと気をよくしていたのだが、親しくなるとじっくり聞いているとどうも違う。偉い、のではなく、単にひとと違う、のらしい。ハズレているのだ。「あんたは規格外よ」と言われ、おおいに笑い、納得した。夫もわたしも、普通がいい、という考えは、微塵（みじん）もない。

平凡は、つまらない。

4月に話を戻そう。

いつかわからない手術を待つ、というのは精神的に良いものではない。夫は眉を曇らせている。

秋、いっとき眠れぬ夜が続いたようで、わたしには男の更年期だと言っていたが、女房ががんだという悩みのためなのは明白だった。夫はアメリカに出張中に電話で最初の知らせを受けて、頭をぶん殴られたようなショックを受けたらしいが、海を隔てていれば、ショックを腹の中に抱えている以外、何もできることがない。

そのあと8月に日本でわたしがぼろぼろ泣く傍にいて、一緒に医者から図解つきの説明を受けてからはことが現実と腹を据え、前期のきつい化学療法でわたしがひっくりかえていたあいだ、落ちこんでいた。そのあと一時期落ち着いたものの、今回手術を前にまた不安と心配が増してきたらしい。

わたし自身は、手術そのものにたいした不安はなかった。オテンバなのか不器用なのか骨が弱いのか、たぶん全部当たっているだろうが、今まで骨折を5回、脱臼を1回している。スケート、交通事故、合気道、転落、とそれぞれ理由はあるが、うち3回は入院し、1回などは足首に金属片とネジを6本入れる手術をしている。それもアメリカでだった。

アメリカには1年しかいなかったのだが、下の息子は耳の手術をするし、わたしは自動車をぶつけ、裁判所には行く、スケートでは足を折って2カ月松葉杖をつく、夫は車にはねられて救急車に乗る、上の娘は湖に落ちる、買い替えた自転車は盗まれる、旅行に行ったらレンタカーを借りれば1週間で2台故障して取り替える、というなんとも忙しい波瀾万丈な年だった。

あとで気がつくとき、夫は前厄だった。ふだんそんなことは考えもしないのだが、あれだけ災難が続くと「やっぱり、厄年ってあるのかな？」と思うのが人情である。

足に金属のネジを入れたのも、日本で1年後に出したのも全身麻酔でだった。盲腸も切っているし、4回のお産も自然分娩とはいえ病院だから、わたしは入院だの手術だのには、幸か不幸か慣れている。

わたしの両親も、ともに結核で手術をしている。特効薬ストレプトマイシンが出る前の、昭和30年前後のことである。特に母は手術がまだハシリのころで、のるかそるかの生命（いのち）をかけた博打（ばくち）のようなものだったらしい。左の肋骨を2本、肺を5分の1取り去るといって大手術で、一時は死にかけてという。当時付き添っていた祖母からも「もうだめかもしれんと言われての、辛かったちゅうもんじゃあない」と聞かされた。母は痛みがひどくて目が覚め、その後あまりの痛みにより再び気を失ったこともあると言っていた。父も母も背中の中肩甲骨に沿って、30センチ以上の長い、切って縫った痕（あと）がある。

それに比べれば、片方の乳房を切り取る、というのは、はるかに簡単な手術である。肺がなければ生きていけないが、乳房はなくても生きていける。加えて、40年前とは設備も、薬も、技術も、何もかも比較にならないほど進歩している。胃や盲腸の手術だと消化機能がひとつおりの回復しなければならないが、乳房はその必要もない。傷が治りさえすればいい。それに、田舎の総合病院ならいざしらず、がんセンターの医師にとって、手術は毎日繰り返してやっている日常的な業務に過ぎない。

心配するほどのことはない。

ただ、わたしは化学療法でからだ弱っていて、調子の悪いときは、今眠ったらこのまま目が醒（さ）めないのではないか、と思うことが何度かあった。気力も弱っていたのである。全身麻酔は三度目とはいえ、ひょっとしてそのまま、永遠の眠りにつくのではないか、というぼんやりとした不安が、誰にも言いはしなかったが、心のかたすみにひっそりとあった。いくら理屈にあわない不安だとわかっていても、感じるものは仕方がない。わたしはすなおに泣いた。

さて、金曜日に電話がかかってくると思って待っていればイライラせずすむ、と思っていたら、火曜日に知らせがきた。夫の会社に電話をする。ああよかった、と夫の声が弾み、

「今なら仕事に差し支えない。2日休みをとるよ」

「あら。手術の日は来て欲しいけど、入院するときはかばん持って行くくらいだから、ひとりで上等よ」

しかし夫は手術室だって病室だって前もって知っておきたいから、送って行くという。

なに、アメリカでわたしが足の手術をしたときなどは、夫には手術時に来る必要はないと言ったし、実際夫も来る気がなかったのである。わたしは12月30日の夕方に骨折してすぐ入院したのだが、国民皆保険は存在せず、民間保険会社は出費をケチる傾向にある国のことで、翌日の大晦日に手術、翌々日の元旦に退院するという早業であり荒業であった。全身麻酔の手術の翌日に退院させるとはなんて無茶だ、なんて無責任なんだ、と、あとで日本の医者に両手を振り回してわめかれたものである（わたしに言わないでよね）。

外国で年末年始に子守りが急に手配できるわけもなく、夫はわたしのことより、いかに8歳、6歳、4歳、もうじき2歳、の4人の子の面倒をひとりでみるかでテンテコ舞い、頭もいっぱいだった。手術前に家族が誰も来ていないと知った医者は眼を剥（む）いたが、わたしは落ち着いて彼に「説教」した。

「夫はここにいても立ち会う以外の役には立たない。だけど家では4児の面倒をみるという非常な役に立っている。ここに夫がいなくてもわたしには一向



にかまわない。手術するあなたさえいればいいのだ。さあ、さっさと切りなさい」

今回はさすがにもう少し弱気だが、しかし、夫が2日続けて休む必要はなかった。手術は、聞いていたように入院の翌日ではなかったのである。

まったくイタリア人のいいかげんさにはたいてい慣れてきたつもりだが、それでも開いた口がふさがらないことが、いまだにある。商品の品質管理などその最たるものだ。天井の切れた白熱灯を取り替えようとねじったら、電球のガラスの部分だけ手の中であって、口金の部分はガラスからきれいにはずれて差込口に残ったままだった。その光景に、わたしは1分以上自分の眼を疑っていた。ようやく事実を理解すると、脚立（きやたつ）を降りて壁のスイッチを押しに行くのが面倒だが、電源が入ったままだと、口金を介して200ボルトに感電するのが怖い。

いいかげんなのは商品だけではない。トイレの水が出なくて業者に電話したら「明日の午前10時に行くよ」と言う。でも来ない。12時にこちらから電話をすると、「ああ、行けなかったよ」とフツーに言って謝りもしない。業者なら、行けなくなる前に自分から電話するべきでしょ！

携帯電話を修理に出したら「直ったら電話するからね」と店員が言う。ひと月待っても電話がこない。外国語で電話をかけるのは気が重いので店まで行くと、「ああ、直ってるよ」と店員はニッコリ笑う。「ねえ、あんた電話するって言わなかった？」と聞くと、「うん、電話したよ」とうなずく。不思議に思っ「その電話に誰か出た？」と尋ねると、「ううん、誰も出なかった、ってノートに書いてある」と平気で答える。

日本じゃそれを「電話かけた」とは言わないっ!!

とても先進国とは思えない。

万事きちょうめんな日本からすると、ばかりと開いた口の顎（あご）の下を掌（てのひら）で押し上げて閉めたが、たまらずもういっぺんがっくりと顎が落ちてくる、とでも言いたいほどの、ケタはずれのいいかげんさである。

今回の入院では、それが頂点に達したとっていい。

入院の日を決める段取りの悪さなどは、入院してからのあれこれ、特に手術日が決まるまでに比べれば、ほんの序の口に過ぎなかった。

わたしは朝8時に病院に着き、血液検査をすませたあと、病室に案内された。ここまではよかった。

わたしは午後心電図と肺のレントゲン写真をとりにいくのだろうと、戸棚に荷物を入れ、寝間着に着替えてベッドで待っていた。ところが誰も呼びに来ない。呼びに来ないどころか、検査予定が何時なのかも言いに来ない。ましてや、日程や手術、病院の規則の説明すらない。完全にほったらかしである。男女の看護師を捕まえて聞いても、わたしは知らない、と言われるだけだ。

いったい手術はいつなのだ。

明日ではないのか。

イライラしているわたしに、

「正午までに通知がなければ翌日の手術はないわよ」と平然と言ってくれたのは同室の患者である。

「そんな馬鹿な。たいてい入院の翌日、遅れても翌々日には手術と聞いていたわよ」といきまいたが、

「わたしも手術の前に4日待ったのよ。予定なんか説明しやしないって。言ってきたら翌日。言ってこなかったら翌日はない。それだけよ。翌日以降のことなんか誰も言わない。待つしかないわよ」としれっと言う。

信じられない思いで、それでも睡眠不足からうとうとしていると、夢を見た。わたしより頭ひとつぶん背の高い、小山のように大きな女性看護師に、「こんな扱いがあるか、いつ手術をするのか説明くらいしたらどうだ。患者の心理を考えてみろ」と猛烈な勢いでイタリア語でくっつくかかっている夢だった。

明るる日も同様に過ぎた。心電図の検査のみ。通知、説明はいっさいなし。看護師室に聞きに行ったら、医者が「ああ、あなたは5階の乳腺科に部屋がないから、この3階の形成外科にいる患者さんですね。担当じゃないからわたしたちにはわかりませんよ。今に5階の医者が来て説明しますから、待つてなさ

い。何時ごろって？ それはわかりませんね。時間は決まってないですから。大丈夫、今日中に必ず行きますよ」

とんでもない、口からでまかせだった。誰も来ない。昼寝してまた夢を見た。今度は医者にかみついている夢だった。

眼を覚まして、今のは夢だよな、わたしは実際にはなにも怒鳴ってないよな、とぼんやりした頭で考える。半分は怒鳴りつけたような気になっている。

夕方、わたしの主治医のひとりである若い女医が、ふらりと現れた。

「名前を見たから寄ってみたのよ、どう？」

「言っちゃ悪いけどひどいわね、このやりかた」と、調子は抑えながらもわたしは不満を訴えた。

「あら、まあ、それはふうん、困ったもんだわね。わかった。わたし知っている外科医に話してみるわ。でもね、わたしは腫瘍科で、よその科のことに口を出すわけにはいかないから、今すぐどうこうできるって約束はできない。そこはわかってね」

彼女の態度には思いやりがあって、わたしはホッとした。

しかし今までの経過でいいかげん頭に来ていたから、すぐ外科医と話がつくとは期待してなかったが、予想に反して彼女は30分後にもう一度現れた。この国でものをいうのはコネであった。若い外科医が同行している。

彼はすなおに謝った。わたしたちは5階にいるもんだから、3階のここがほつたらかしになったのは申し訳ない、と。ここで初めて聞いた血の通ったことばだった。手術は月曜日か火曜日だと言う。あ、そう、ありがとう、とニコリ言いながら、わたしは内心、「ほんとに月曜日かどうかわかったもんじゃない、麻酔をかけ始めたらそのとき初めて、手術をするって信じてやるわい」とつぶやいていた。

3日目。レントゲン撮影のみ。あとは朝昼晩と食堂に食べに行って、寝るだけ。食堂でくっちゃべっていると、待っているのはわたしだけではないことがわかった。同じ水曜日入院したマリアンジェラも何も知らされず、イライラしながら待っていた。別の女性は金曜日に入って1週間後の今日手術だという。

「1週間!？」

「まだいいんだってよ。わたし聞きに行ったら、あなたは金曜日か月曜日って言われたんだけど、わたしの前にまだ10日も待ってるひとがいるんだって」

「そのひと何か待たなくちゃいけないような問題があったの？」

「それは知らないけど」

「待つほうもたままないけど、病院にしたってとんだ無駄よね。泊まらせて食べさせてるんだから」

「ほんとよ。わたし明日手術がないならあさって家に帰るわ。週末は許可をもらえば外泊ができるんだって。日曜の晩帰ってくればいいんだってよ」

わたしもそうしよう、と決めながら、患者間のほうが情報が手に入るとは、一時代旧（ふる）いのではないのかとあきれた。

この日も正午までに何も言ってこなかった。

つまり、月曜日の手術は、ない。

「へんっ、やっぱり期待するもんじゃない。もう明日か、明日かと待つのはやめにしよう」とわたしは思った。待ちくたびれてイライラするだけ損だ。

入院させたからには彼らは必ずや、わたしの手術をするであろう。いつかはわからないが。それなら、期待、という感情はこの際ちょっと棚の上に上げて考えないことにして、腰を据えて待とう。

気持ちを切り替え、隣の患者が退院する際に残してってくれたイタリア語の雑誌を読むことにした。ある女優が13年前に顔のしわをとるためにシリコンを入れて整形したら、今年になって顔が変形し、もう一度手術をしたら顔が腫れ上がってしまい、今はまだ包帯だらけのミイラのような姿だという記事。イギリスの皇太后が亡くなって、彼女の一生をたどる物語。地下の水の流れる洞窟を、自分の開発した器械で真っ暗な中2キロも溯（さかのぼ）っていく探検野郎の話。核融合の簡単な実験の記事。ふだん何語でも雑誌は読まないのだが、写真が多くわかりやすく、おもしろかった。暇だけはたっぷりあるので、辞書をひいては新しい単語をノートに書きつけ、復習する。

もうひとつ暇つぶし用に、詩のノートを持ってきていた。アメリカで短大に

通っていたとき、小説なるものを一生に一度書いてみたくて「創作」という講座をとったら、詩も書けという。英語の詩なんて韻をそろえなきゃいけないし、日本語でだって 20 年も書いてない。ましてや外国語でできるものかと頭をかかえたが、韻はふまないでもいいというから、四苦八苦した挙げ句なんとか 6 つほどひねりだしたら、ひとつをえらく講師が褒（ほ）めた。こういうのを書いて欲しかったのよ、と授業中皆の前で言ってくれた。四十雀（しじゅうから）という題のもので、ほかにも辛夷（こぶし）、野の林檎（りんご）など、自然とひとの愛情、罪などをからませたものばかりだったが、ぜひとも詩作を続けろと励ましてくれた。日本に帰ってもぼちぼち書いてはいたのだが、いつか英語のままアメリカの雑誌社に送るか賞に応募するかして世に問うてみたい、という野心はその地にいなくては果たされず、6 年が過ぎた。

それが、先日たまたま地元アレーゼの図書館に行った際、コンサートの情報はないかとポスターを眺めていたら、北の町レニャーノで詩のコンクールがあるという。イタリア標準語部門と方言部門のふたつで、1 等は賞金 40 万円。ダメで元々、わたしの詩をイタリア語に翻訳して挑戦してみる価値はあるではないか。万が一わたしの詩に価値があるものなら、何語であってもひとはいいと思うはずである。

幸い、イタリア語学校の先生にひとつふたつ見せたら、「夫婦して読んで感激した。ぜひやってみろ。文法、ことばの選択その他、いくらでも訂正してやる、助言もする」と言ってくれたので、英語からイタリア語への翻訳という作業に、もの好きにもとりくむことにしたのである。ちょうどいい時間つぶしになった。

結局手術は、入院からちょうど 1 週間たった水曜日だった。前の日に、ふだんのように翌日の食事のメニューを選ぶ紙が配られないから、あら、ひょっとして、と思っていたら同意書を渡されてサインをするよう言われ、午後麻酔科の医師に呼ばれ、さらに夕方看護師が「絶食」という札を枕元に置くに至って確信し、夫に電話をした。

マリアンジェラは金曜日か月曜日、と言われて実現せず、次は月曜日か水曜

日、と言われてまた裏切られ、可哀そうに日ごとに顔が暗くなっていった。

「こうやって待たされるの、この病院だけじゃないみたいだよ。わたしの友だち、旦那さんが心臓の手術したんだけど、3週間待たされた、って言ってた」とわたしが言うと、

「冗談じゃないよっ」

日ごろは穏やかな彼女が叫んだ。

血相が変わっている。

「ウチらでさえ、たかがお乳の手術でこんだけ気をもむんだよ。心臓の手術でおんなじことやられてごらん、手術の前に心痛であの世行きだよ！」

まったく。

そのあいだに、イタリアの病院では不必要な入院で年間何百万円だかの無駄使いをしている、というニュースがテレビで流れ、同室の患者と、顔を見合わせてうなずきあったものである。

日本でこんなことをしたら、悪評判が広まって患者が来なくなるに違いないが、イタリアの公立病院は多かれ少なかれどこもこんなものだから、改善されようがない。パトリツィアも、娘が膝のじん帯を手術したときも1週間待ちだった、とわたしを慰めた。あなたたちこれが辛抱できるなんてよっほど我慢強いよね、と言うと、平気なわけじゃないわよ、でも文句言ったってな～んにも変わらないから、諦めてるだけよ、と答える。

だいたいイタリアは毎日どこかで何かのストをやっているくらい、労働者の力が強い。かなり社会主義的な体質の国である。ここの医者たちも国家公務員だから、何をやっても給料と地位は保証されている。公立だから、効率を考えなくて税金の無駄使いをしても、誰も責めないというわけだ。社会主義の典型的な悪例である。

同室の患者は3人入れ替わった。初めのひとは、腹にも傷があって痛いというので聞いてみると、以前放射線療法を受けたおかげで大胸筋が使いものにならず、代わりに下腹の筋肉を胸に移植したのだと説明してくれた。前にも書いたが、乳房の再建には、大胸筋の下に袋を入れ、中に生理食塩水を何回かに分

けて入れて、徐々に膨らませ皮膚を伸ばしていく。そして数カ月後にシリコンと入れ替えるのである。

2 人目は、その移植した筋肉がうまくつかず腐ってきたので、取り去らなければならなくなったの再入院だった。あなた怖い？ と言いながら服をめくって見せてくれた胸は、10センチ四方ほどの皮膚が赤黒く変色した、ちょっと凄いながめだった。

こんな実例を見せつけられると、「ありゃ、りゃ、乳房の再建なんてやめといたほうがいいのかいな」と思わざるをえない。しかしわたしは放射線療法は受けないから筋肉の移植は縁がないし、冷静に考えれば、こうやって病院でお目にかかるのは、うまくいなくて帰ってきたわずかの例であるはずで、大多数の成功例は病院に帰って来ないから、知る機会がない。

イタリア人の乳房はいったいに、でかい。わたしの胸の3倍から5倍あるのが珍しくない。再建しても反対側の乳房ほどの大きさにならない場合は、その正常な乳房から一部分を切り取り、左右のバランスをとるのだという。だから、最初の同室患者は左右の乳房と腹の3カ所、同時にメスを入れられたのだった。

特に、歳をとると誰でも乳は垂れるが、痩せたひとの巨乳が垂れると、先が臍（へそ）のあたりまで達する（！）ことがあるという話で、日本人の友人は実際にフランスのヌード海岸でその「惨状」を見たと言っていた。わたしはそれでも半信半疑だったのだが、実際にぽっちゃり患者の手術後のパジャマ姿を病室で見ると、乳房を全部摘出した側の胸がほぼ平らなのにくらべ、反対側はかなり下のほうまでもっこりしている。あの妙な形のでっぱりは何なんだろう？ と考えてみると、垂れた乳以外にはない。日常的にはみなさんブラで支えているから、今まで見かけたことがなかっただけだ。歳をとったら巨乳がどれだけ垂れるか、納得した。

が、臍まで垂れた乳と同じような形のシリコンはない、あるいは、ひよっとしたらあるのかもしれないが、使わない（そりゃそうだ！）。巨乳には巨乳なりの不便があるものだ、と妙なところでふだんの劣等感が慰められた。

で、わたしの場合、大きさはほどほどだし、大胸筋は損なわれておらず、触

診では腫瘍が筋肉にくっついてもないから、悪いほうの乳房と腋（わき）の下のリンパだけ切除すればいい。予定の手術時間は3時間。

当日、朝の8時にはわたしのベッドのシーツの上に、防水布とさらにもう1枚シーツが敷かれた。鎮静剤をのんで病室を出、8時半に手術室に入り、10時に医者が「アリヴェデルチ」（さよなら、またね）と言うので「どうして」と聞くと、「麻酔だよ」。そのことばを最後にすうっと意識がなくなり、病室に帰ってきたとわかったのは午後2時だった。

からだ中が痛い。右の胸から腋（わき）が痛いのはあたりまえだが、ちょっと脚を動かしても腕を動かしてもみな胸に響くのである。枕の落ち着きが悪いので肩をゴニョゴニョと動かそうとしたら、余りの痛さに1センチ動かしたところで止まってしまった。寝返りもうてない。大きめの吐息をついてさえ、大胸筋がつられて動くものだから、一瞬息を止めるほど、痛い。くしゃみなんてとんでもない。

熱をとるために、大きな氷を入れた袋が胸の上に置いてある。朝から水も飲んでいないので口が乾くが、しばらくはだめだと、湿してもくれない。口渇は化学療法の後遺症でもあるのだが。痛いという痛み止めをくれた。多少は効いたが、身動きできない辛さとあいまって、苦しい。イタリア語学校の先生と同級生が3人見舞いに来てくれたのだが、ろくに話もできなかった。

それでも1時間毎に、少しずつからだは楽になっていくのがわかる。頭にきたのは小用を足したいと訴えると、おまるを持ってきてくれたのはいいが、用がすんだあとで男性看護師がパンツを上げてくれないのだ。上げてくれと頼むと、「点滴でたくさん尿がでるからどっちみちまた用を足さねばならない。それなら下したままのほうが楽でいい」という返事である。パンツを上げるのに何分かかるといえるのか。膝の上で丸まっているパンツは、非常に落ち着きが悪い。いくら毛布の下だといってもお断り。不愉快極まりない看護師の態度だった。だいたいこの手術着というのは割烹着（かっぽうぎ）のような格好で、お尻は丸見えなのだがその下は木綿ならパンツも靴下も可、という妙な規則だったから、足が冷えるわたしは両方履いていたのである。



さらにあきれたのは、血圧はその晩測りにきたが、2週間余りの入院中測りに来たのは、その一度だけだったことである。手術前は一度も来なかった。体温測定も手術後の5回だけ。手術室では心電図も多分あったのだろうが、前もって血圧も体温も確認せずに手術室に送りこむ神経がすごい。手術後の晩も、「具合どう？ そう、熱は？ ない？ うん、わかった」と言っただけで、体温を測りもしなかった。体温計を初めてくれたのが、翌日のことだ。それも、測れ、と言っておいてあと何度だったか聞きに来ない。よくもまあこれで入院患者の管理ができるというものだ。日本の看護師が聞いたら卒倒するのではないか。

まだある。シーツの交換は、3日続けてやったり、1週間やらなかったり。わたしが体温計をうっかり落として割ってしまったとき、すまないがかたづけてくれと頼んだら、看護師はああわかったと言っただけ。定時の掃除にくるまで3時間ほったらかしで、ガラスのかけらの上を平気でじゃりじゃりと踏んで歩いている。寒いから毛布をもう1枚くれと夜に頼んだら、もってきてくれたのは30分後だった。看護師室でテレビドラマを見ながら書類仕事をしていた彼は、コマーシャルまで眼が離せなかったのだろうか？

ひどいのは看護師だけではない。わたしだけガーゼ交換にお呼びがかからないのでせっつきに行くと、いやそうに来た女医は手袋もつけずに頭をちょいと搔（か）いたりしながら、その手を洗いもせずに消毒をした。

それでは消毒にならないぞ、おい！

退院や外泊の許可、手術の説明、傷の消毒についても3階と5階の医者として責任のなすりあいをする。手術は当番制であるからと、結局わたしは自分の執刀医の名前を知らないままである。

縫ったあとも醜い。胸はいいのだが、腋の下はしわが寄り、でこぼこができ、ノースリーブの服を着るのがはばかられるほど、目立ってみっともない。退院後に包帯交換をしてくれた別の医者が、30年前から縫い方は進歩してないわね、とのたもうた。

まったくこれが、ヨーロッパでも有数の、イタリア語で言う「背広の衿の穴にさした花のような」第1級の病院というから恐れいったものだ。イタリア中

から患者は来ているのだが。イタリアを長靴に見立てたら、ミラノが一番上の膝の真ん中くらいになるが、踵（かかと）にあたるプーリア州から来ていたひとともいた。

毎晩、というにひとしく、蚊が出た。夜中、プウ〜ンという音に何度も自分の顔や頭をはたいた。わたしは常に蚊に愛されるタチである。イタリア人は「あんたは血が甘いだよ」と笑う。2番目の同室患者は「ここ、いつも蚊が出るのよね。エアコンの出口から出てくるのよ」と用意周到に電気式の蚊取り線香を持参していた。

それを聞いて、ふだんめったに怒らない夫がキリキリと眉を吊り上げた。

「病院が不潔っていうことじゃないか！ 院内のどこかに、ひとの手の届いていない、だけど蚊には利用できる汚水溜まりがあるんだよ。それが国立病院か、冗談じゃない！」

こんなことが前からわかっていたらイタリアでの手術に反対していたな、と夫は断言した。イタリア人がいいかげんなのはよく知っている、でも国立がんセンターまでこんなにひどいとは思わなかった、と。

彼は製薬会社の研究員である。非臨床とか前臨床試験とか呼ばれる一連の作業では、動物を使って実験を科学的に行い、資料を統計的に意味のあるものとして処理するために、常に一定の規則に従っていなければならない。2種類の薬のどちらが効くか試す実験をするとき、動物の部屋の温度が20度だったり30度だったりしたら、その温度差のせいで結果が違うかもしれないから、そのデータは使えない。高血圧の動物が2つの群れの1つだけにたくさん混じっていたら、そのせいで効き目や副作用に違いが出るかもしれないから、その群れは実験には不適當である。つまり、調べたいこと以外には、他のすべての条件を同じにすることが鉄則で、そのためには、細かなことを日常的にきちんとすることが要求される。

夫に言わせると、イタリア人は、この手の「毎日きちんと」ができる人種ではない。「まあいいじゃないか」の国である。彼は職業柄これが一番我慢ならん、と言う。実験の基礎的な条件を毎日保つのがいいかげんなら、時間が守れない

のも常識。夫の会社で会議が 10 時からなら、10 時前に来ているのは外国人だけ。主催者でさえ現れるのは 10 時 10 分、全員が集まるのは 10 時半。

書類は提出期限が過ぎてから書き始める。さらにひどいときには、提出期限後に役所から書類が届く。「おとといまでに記入して出せ」と。嘘ではない。あげく期限を過ぎると罰金、と注意書きがある。

郵便は 10 通に 1 通はつかない。キッチリしているスイスまで、アメリカ人は郵便を出しに行く。車で 1 時間かかるが、それで故国までクリスマスカードが確実に着くならそのほうが良いと。最近宅配便がはやりだし、夫の会社でも「重要書類は郵便で出すな、民間の宅配便を使え」と指示が出ていると言う。

よくこれでイタリアが G7 先進国首脳会議に入っていると感心する。日本から出張にきた夫の上役は、「さすがに上のほうはしっかりしてるみたいですよ」とは言うが。

イタリア人にそれを愚痴ると、「あら、ミラノはまだマシなのよ。南に行くともっとひどいから」とたいてい言い返される。下には下があるということか。都市銀行に勤めていたパトリツィアによると、彼女のいたミラノの本店では、業務開始時間として表示してある 8 時半には、カウンターにひとがいて仕事を始めていた。しかしローマの支店では、9 時にならないと電話が通じなかったという。

給料泥棒、ということばを思い出しますね、はい。

とは言ってもわたしは自分自身がかなりいいかげんで、「毎日きちんと」ができる人間ではないので、このことに関しては「気楽でいいや」というところがある。アメリカは時間厳守の国で、歯医者予約に 30 分遅れて行ったらその日の治療は受けられない。わたしは二度無駄足を踏んだ。ノルウェー人のマリーも故国では同じだと言っていた。しかも、もしも医者の都合で 15 分以上治療開始時刻が遅れたら、治療費はタダになるのだそうだ。

イタリアでは、診察が予約時間より 1 時間早くても遅くても関係ない。たいてい診てもらえる。日本とこの点はよく似ている。病院の受付に行ってから順番待ちだから、1 時間以上待たされることが珍しくない。「なんのための予約時

間か」とため息がでる。一度イタリア人の初老の男性が同じことを受付で怒鳴りつけていて、振り向いた彼にわたしは思わず「よくぞ言ってくれた」とニコリ笑いかけたものだ。

むしろ、わたしがどうにもこうにも腹にすえかねるのは、「こいつら」の「無計画性」である。先を見通すとか、全体を見る、とかいうことのできる人材が、極めて少ない。というより、文化や習慣、仕組みとして、ない、という感がある。

いきあたりばったり。

わたしの手術が入院して1週間後で、しかも前もってまったく通知がなかったのも、がんセンターでは常に、明くる日の手術予定しかたてない習慣だからだった。週間予定とか、月間予定とかいうものが存在しないのである。この、国立病院に週間手術予定が存在しない、ということくらい、今回の入院で信じられなかった事実はない。医者がそう告げた時、謎はとけたが、わたしは呆（あき）れ果てて苦情を言う元気も失せていた。

もっとも、わたしは最悪の時期に入院したらしく、わたしの6日後に同室に入院してきたロセッラは、3日待ちで手術だった。どうも復活祭の休み中、外科医どもがそろって休暇をとって手術数が少なく、わたしの入った復活祭直後に手術待ちの患者がたまっていたらしい。

それなら入院させなければいいようなものだが、入院を管理する部門は患者の数だけを数えるから、手術には関係なしに、ベッドが空くが早いか次の患者を入れるのではないかと思う。ここでも、「全体を見て」判断を下す習慣が見られない。

わたしは化学療法を受けているあいだ、イタリア在住の日本人に「ここはいいですよ。皆さん、もしも乳がんとわかったら、どうぞコルソ・ヴェネツィアンの国立がんセンターなり、ヴィア・リパモンティのヨーロッパがんセンターなりにおいでなさい。無料で、お乳の部分切除か全体切除かのあと再建手術もできますよ」と勧めるつもりだった。しかし、手術がすんだ今では、「いいところもたくさんありますけど、行くならよほどの覚悟をしてからですね」と言わ

ざるを得ない。

ただ、わたしはどういうわけか、いろんなところで他人がまずしないような体験をしている。人並外れた好奇心と無謀さが妙な体験を呼ぶのかもしれない。あとで友人と話してみると、あら、そんなとんでもないことはなかったわ、と言われることが折りに触れあるので、もしかしたら、わたし以外のひとの場合にはもっと楽かもしれない。

一番妙な体験は、家族でフィレンツェに行ったとき、当時6歳の次男が道の向こう側からわたしを見てとび出し、バイクにひかれたときだった。息子が頭を打ってわあわあ泣くので、誰かが呼んでくれた救急車に乗ったら、中に坊さんがいたのである。

へえ、さすがにカトリックの国だ、と思ったが、ミラノに帰ってその話をイタリア人にすると、みんな狐につままれたような顔をした。

「坊さんが救急車に乗るなんて聞いたことがないわね。マドカ、あんた何か見まちがえたんじゃない？」

「黒くて長い服着て、腰のところに紐でしばってたけど」

「じゃまちがない。神父だわ。偶然かしらね」

「いろいろと指図してたわよ」

「何それ。縁起の悪い」

病院の神父だって、一番用があるのは死ぬときである。ま、息子は無事だったから、祟（たた）られたわけではない。